

「小学校サブコース演習」における教育心理学的卒研テーマ探究等を支援する取り組み

大学院（教育実践高度化専攻）・橋本 巖

1. 本授業の位置づけ・目的・授業の概要

「小学校サブコース演習」（以下、小サブ演習と略記。今年度の受講者は3名）は、教育学部学校教育教員養成課程初等教育コースの小学校サブコース開設の授業である。履修の手引には、「3年次後学期に開講される必修科目です。卒業研究指導教員（以下、指導教員と略記）のもとで、卒業研究に必要な知識や技能等を演習形式で学びます」と説明されている。筆者の本授業のシラバスでは、上記に加えて「実践的な関心・問題意識を持ち研究に携わるといふことの面白さ、自己と社会にとっての有益さ、責任（倫理）などについて自覚的に学び、資質・素養を身につける」ことを目的としている。

小学校サブコースでは、2年次後期に各自の関心ある教員との面談を経て卒研指導教員が決定し、3年次から決定した指導教員のゼミに所属する。ただし3年前期及び4年前期には卒業研究に関する必修科目はない。そのため、小サブ演習および卒研指導上の基本的課題として、第1に「時間的展望」の形成がある。大学生活としては、3、4年次の教育実習や教採・就活等を織り込み、また研究活動に必要な構成要素（テーマの絞り込み・文献研究、調査準備や協力依頼、調査実施と分析、論文文化等）を知り、研究計画としての時間的な流れとデッドラインを自覚してもらうことである。第2に、卒業研究に向けて教育心理学の基礎的な知識や技能を学修してもらいつつ、小サブ演習を含む1年半の研究を動機づけるに足る自分自身の「関心」や問題意識、リサーチクエスチョンを醸成し具体化・明確化してもらうことである。希望指導教員を提出する段階での興味・関心は、教育心理学分野の具体性や専門性を欠いた「思いつき」的ラベルである場合もしばしばある。これを、小サブ演習では、各自が実際の研究例や実践例を探して検討し発表する作業の積み重ねと、ゼミでの議論や授業時間外の個別指

導（オンラインを含む）による共有を通して、具体化・明確化しようとした。

過年度のコロナ禍における卒研指導経験と時間的展望現下のコロナ禍におけるゼミ時間の確保困難を勘案して、本年度は単位にならないプレ小サブ演習を3年次前期に計7回実施した。およそ2週間に1度、毎回3名が簡単にゼミ選択のテーマとなった概念をキーワードとして自由に文献を探しレジュメを作成して発表する。自分が関心を持つことを言語化することや他の学生と話し合いイメージや関連体験を共同想起するような多面的議論は貴重な経験となる。3年後期は、本来の小サブ演習を毎週（13回）実施し、各回発表1名とした。教育実習を経験し、教育との関連や子どもの心理への意識などを強めていた。徐々に、研究論文サイト等を指導して心理学的研究を検索させ引用を遡らせたり、筆者の研究室の過年度の研究や学会動向等を紹介して、いずれ書く研究論文の構成要素や、客観的研究の条件なども学びつつ、卒研のテーマとしての実現可能性などを考えさせた。12月から1月の段階で、先行研究や過去の卒論の調査項目を活用して自発的に予備調査（インタビュー）を2名が実施しており、主体的なテーマ探究がほぼ浸透したと思われる。

2. 授業評価の結果

3年次末に評定式と自由記述による授業評価アンケートを実施した。シラバスに掲げた3点の到達目標の評定から、意欲はあるが知識・技能が不十分とする者と、逆に主体性を今ひとつとする者がいた。自由記述からは、小サブ演習のような、学生が自ら（個人で）調べて発表する形式の新鮮さ、他の学生が調べた研究や議論により自己の関心省察と興味拡大が自覚されたこと、論文を読む読み方が身につけてきたが、統計がわかりにくく筆者の講義を期待していること、等が明らかとなった。次年度の指導の改善に活かしたい。